

# 源興学校について

——旧韓末「日語学校」の一事例——

稲葉 継雄

## はじめに

かつて、韓国（朝鮮）において最初の近代学校を設立した荣誉は、アメリカ人宣教師アッペンゼラー（H. G. Appenzeller）に与えられていた。すなわち、彼が1885年に設立した培材学堂が、韓国の近代学校の嚆矢とされてきたのである。しかし、1974年にソウル大学助教授（当時）慎鏞廈が「韓国最初の近代学校設立について」<sup>(1)</sup>と題する論文の中で、「元山学舎」が培材学堂よりも早いという新説を主張して以来、これが次第に定説となりつつある。慎鏞廈によれば、徳源府使鄭頭爽が、徳源邑民の要請に応じ官民協力して1883年に設立した「元山学舎」（あるいは単に「学舎」、後に「元山学校」と命名された）が、近代的な教育体制を備えた最初の学校であったというのである。だが、この学校に対する1902年当時の日本側の評価は、「今王二十一年（二十年前）徳源府使鄭頭爽の創意に係り元山津の富家より捐金を集めて学舎を建築し新式教育を為すを目的となせしも当時儒生の勢力盛んにして其抛る所となり専ら漢籍を教ふるに至れり」<sup>(2)</sup>と、非常に消極的である。

ここでわれわれは、ふたつの点を認識すべきであろう。つまり、他に先駆けて「元山学舎」を設立するほど、元山には官民ともに近代教育を受入れる素地があったこと、しかし、「元山学舎」の所期の目的は充分には達成されず、そこに、近代学校の一つとしての日語学校が受入れられる余地があったこと、である。

源興学校は、このような元山の地に開設された。数ある日語学校の中でも有名な部類に属する学校である。それは、設立者近藤範治が妻淑子と二人三脚で、一時は淑子がひとりで、学校をもちたてたことによるところが大きい。日語学校の運営に女性が携わった例は極めて稀で、他には光州実業学校の奥村五百子

がいるくらいのものである。(韓南学堂堂主薬師寺知龍の夫人や達城学校の大石シマも、広い意味では日語学校教師であるが、彼女らは、日語学校に併設されていた日本人学級の担当であって、韓国教育に従事したのではない。)

このように源興学校は、有名かつ特異な存在であったにも拘らずこれまで全く研究されておらず、断片的な資料が残されているに過ぎない。本稿は、それらの断片資料を繋ぎ合わせながら源興学校の全体像に接近しようとする初の試みである。

## 一 源興学校沿革

明治の代表的教育雑誌のひとつであった『教育実験界』は、源興学校の起源について次のように記している。

先きに明治三十二年元山に移住して一の家塾を設け韓人教育を開始したるは近藤淑子といへる人にて当時入学せるもの僅に二三十名に過ぎざりしが女史の熱心と韓語に巧みなるとは大に韓人父兄の信頼する所となり入学者日に月に増加するの勢なるを以て三十三年五月大に規模を拡張して源興学校と命名し予科三年正科五年通じて八年の課程となし……<sup>(2)</sup>

ここで注目すべき点は、第一に、源興学校が1899(明治32)年に設立された家塾に源を發し、1900(明治33)年5月に至って正式に源興学校となったことである。一般に源興学校の設立年月は1900年5月とされているが、それは同校の命名および課程整備の時期であって、実質的なスタートはその前年だったのである。

第二のポイントは、近藤淑子のリーダーシップである。実際に、「一の家塾を設け韓人教育を開始したるは近藤淑子」であったとすれば、彼女は、光州実業学校の事実上の設立者(正式の設立者は東本願寺)であり初代校長でもあった奥村五百子と並んで、日語学校を設立した女性として双璧を成すことになる。しかし、それは事実と反する。源興学校の設立者は淑子自身ではなく、淑子の夫近藤範治だったのである。後述する「源興学校問題」に際して、淑子が女性であったが故に問題がこじれたように、当時、女性の身で学校を設立・運営するのは容易なことではなかった。ただ、夫唱婦隨の形で淑子が源興学校の開設に尽力したこと、また、彼女の教育熱心と韓語の巧みさとが源興学校の発展に

寄与したことは否定できない。ちなみに、上の引用記事は1906年4月のものである。当時、近藤範治は日露戦争に従軍、ロシア軍の捕虜となり、妻淑子が、夫留守中の源興学校を守っていた。このことが記者をして、あたかも淑子が源興学校を開いたかのような記述をせしめたのではないかと思われる。

1902年夏に韓国学事を視察した東亜同文会幹事恒屋盛服によれば、源興学校の設立経緯は次のとおりである。

本校は明治三十三年五月近藤範治氏の首唱に係り当時の元山守備隊長牛尾敬二、徳源府監理尹致昊、領事武藤精三郎、郵便局長岡本真一、河野省三郎、市川政高諸氏の賛成尽力に依て成立し爾来各守備隊長各領事之れが維持に勉め以て今日に至れるものなり<sup>(4)</sup>

設立年月「明治三十三年五月」と近藤範治の首唱については前述したとおりであるが、源興学校の開設にあたって日韓の有志、とくに徳源府監理尹致昊の賛成尽力があったことに留意したい。尹致昊は、1881年紳士遊覧団の随員として渡日、中村正直の同人社に学んだ知日派で、いわゆる開化派に属した有名な官僚・政治家であった。したがって、尹致昊と源興学校との縁は偶然に生じたものではなく、彼にとって源興学校への援助は、開化運動の一環であったと考えられる。なお、父である尹雄烈は、全羅南道觀察使として光州実業学校と羅州の日語錦城学堂の設立に手を貸した。これを考え合わせると、尹父子と日本人の日本語学校は、因縁浅からざるものがあったことがわかる。

次に源興学校の財政をみると、1902年夏当時の状況は次のとおりである。（濁点は原文のまま、以下同じ）

経費は元山守備隊より近藤氏の通訳報酬として支給する二十五円、管理より二円警務官より一円を補助し外に明年六月迄に約七百円を居留官民より醸出し其利子を以て維持するの計画なるも到底是等の金額を以て其必要に應ずるに足らず他に費用の出所を求めつゝあり』筆墨紙書籍は一切生徒の負担にて学校より支給することなし而して此校に特色なるは生徒より月謝を徴取するの一事なり第一等は二百文、二等百五十文、三等百文なるも絶えて滞納の弊なし生徒一人別学費は総て七十銭余なりと云ふ<sup>(5)</sup>

ここにあるように、源興学校の収入源として大きな比重を占めていたのは、

「元山守備隊より近藤氏の通訳報酬として支給する二十五円」であった。近藤淑子が韓語に巧みであったことは先にみたが、この点は夫範治も同様であり、範治は、その語学力を活かして学校経営の資金を得ていたのである。換言すれば、元山守備隊から支給される金は、単なる補助金ではなかったことになる。そして、近藤範治が日本軍の通訳であったことが、後に彼の日露戦争従軍、ロシア抑留へとつながる。

監理尹致昊が毎月2円を補助していたことも注目に値する。尹は、源興学校の設立を支援したばかりでなく、月々の経費も補助していたのである。彼は、進級証書授与式など源興学校の行事に招待され、演説を行なったりしているが、その招待は、徳源府監理という地位の故ではなく、学校補助金の出資者としてであったと思われる。

700円の基金の母体は、「源興学校補助会」なる団体だったようで、この源興学校補助会には東亜同文会元山支部も参加している。東亜同文会元山支部は、1902年8月16日、恒屋盛服を迎えての歓迎会の席上、「元山支部は韓人教育を奨励監督するを以て目的となす事」<sup>(6)</sup>などを決議したが、この目的を実現するための行動が即、源興学校補助会への参加であった。恒屋は、「第一項の目的に関し釜山に在ては別に韓南教育奨励会なるものあり元山に於ては源興学校補助会あり両支部員は此目的に向て既に応分の釀金をなし事実上本会の目的を実行し居るを以て故らに新事業を企てざるも其志を達するの道途に在るものと看做すを得べし」<sup>(7)</sup>と報告している。

さらに、先の引用文中「他に費用の出所を求めつゝあ」ったことに関連しては、この後の『東亜同文会報告』に「先年本会幹事恒屋盛服氏ノ尽力ニテ○○○ヨリ若干ノ補助ヲ受クル事トナ」<sup>(8)</sup>ったとある。○○○の部分伏せ字となっており、具体的な補助金の出所は知るすべがない。

源興学校が学用品の一切を生徒に負担させ、加えて月謝まで徴収したことは、当時の日語学校としては極めて稀な例である。授業料を徴収しないのみならず、学用品一切、さらには弁当まで支給するのがむしろ一般的だったからである。そこには当然、学校財政の逼迫という理由もあったであろうが、反面、経済的な負担を強いても生徒が集まるほど元山地方には日本語教育の需要があったとみることもできる。

上述したような手立てによって財政の安定が図られる中、源興学校は、元山の地域社会に次第に根を降ろしていった。1902年11月16日の第4回進級証書授与式の模様を伝えた「元山通信」は、「全体に年と共に発達するは洵に嬉ばし

き事なるが特に本年の如きは是迄になき父兄の来校者多く渠等に漸く日語学校の效能を知らるゝに至りし事最も悦ぶべき現象なりとす」<sup>(9)</sup>と総括している。

ところが、このように順調に発展しつつあった源興学校も、1904年2月に勃発した日露戦争によって一大危機に直面することになった。近藤範治の留守を預かっていた妻淑子と大木元山副領事との対立に端を発した「源興学校問題」がそれである。この問題の発生以来1904年9月末までの経過は次のとおりである。

爾来近藤氏モ一層事業ノ拡張ニ尽力中同氏ハ陸軍通訳ノ任務ヲ帯ビテ勤務中金州丸遭難ノ為メ敵ノ捕虜トナリ露国ニ押送ノ身トナリシニ付跡ニ残リシ夫人淑子ハ夫ニ代リテ校務ヲ執リ自カラ教鞭ヲ取りテ夜々勉強中ノ処此度大木元山副領事ハ淑子ニ対シ婦人ノ身ニテハ一校ヲ統理スルノ資格ナキニ付別ニ校長ヲ戴キテ其配下ニ教鞭ヲ執ルカ左ナクバ同校ト絶縁セヨト迫リタリ淑子夫人ハ同校管理権限上ニ付全然領事ト意見ヲ異ニシ為メ一問題トナリタルガ領事ハ飽クマデ絶縁ノ事ヲ迫ルニ付止ムナク之ニ黙従スル事トナレリ然ルニ生徒ノ父兄等ハ多年近藤氏夫人ノ恩誼ヲ蒙リシ事トテ何レモ領事ノ処置ニ反対シ一同袂ヲ連ネテ退校セシムベシト主張シ殆ンド四分五裂ニ帰セントス時節柄惜ムベキ事トモナリ<sup>(10)</sup>

淑子としては、日韓の官民有志の補助を受けているとはいえ、源興学校の経営は基本的に近藤夫妻の私的事業であるという意識が強かったであろう。これに対して領事側は、「婦人ノ身ニテハ一校ヲ統理スルノ資格ナキ」ことを理由に淑子の退陣を迫ったわけであるが、その根底には、源興学校をむしろ公的事业とみる認識があったものと思われる。その鍵となるのが、源興学校校舎の性格である。源興学校の「土地家屋は韓人教育の為め特別に日本政府より下付せられたる基金七百円を以て買入れ無賃にて貸与したるものにて居留地共有産」<sup>(11)</sup>だったのである。このため、淑子は一旦、絶縁要求を呑まざるをえなかったのではないか。しかし、問題をこれで終わらせなかったのが、韓国人教師と生徒およびその父兄であった。淑子が、いかに彼らの心を掴んでいたかがわからうというものである。

その後「源興学校問題」は、近藤淑子の学校引払い、後任校長の就任（以上1904年10月8日まで）、生徒の新規募集（10月19日）とその失敗、近藤夫妻のポスト再確保（10月29日以前）という経過をたどって一件落着した。以下、そ

の間の経緯に関する資料を列挙しておく。

近藤淑子ハ愈ヨ同校ヲ引払ヒテ領事ノ手ニ引渡シ其後任者トシテハ元、元山小学校ノ教員タリシ某ト定マリ既ニ就任センモ韓人教師始メ生徒等一人トシテ登校スルモノナク因テ大木副領事ハ総代其他委員等ヲ率ヒテ学校ニ臨ミ韓人教師及生徒ノ父兄ヲ召集シテ説論ヲ加ヘシモ容易ニ応ズルノ色ナク尚ホ監理及警務官等ヲ以テ頻リニ説論中ナリトゾ<sup>(12)</sup>

前報セン如ク源興学校ニテハ近藤淑子手ヲ引キシ以来生徒一人モ登校セザルヲ以テ大木領事ハ従来ノ生徒收容ヲ断念シ更ニ新生徒ヲ募集セントテ監理及韓人有力家ニ命ジ勧誘中ナリ<sup>(13)</sup>

既ニ通信センガ如ク同校ニテハ近藤夫人絶縁トナリ新ニ校長ヲ設ケタルニ生徒一同々盟罷校シテ一人モ出席スル者ナク止ムナク更ニ生徒ヲ募集シツムアリシガ其後更ニ淑子夫人ト領事トノ間ニ妥協成立シ新校長ハ近藤氏ノ不在中代理スル事トシ近藤氏帰校ノ上ハ全然同氏ニ引続グ事トシ而シテ其間ハ淑子夫人モ相俱ニ教鞭ヲ執ルト云フニ着落シタルヲ以テ不日再ビ開校シ従前ノ通り授業スル事トナリタル由ナリ<sup>(14)</sup>

「源興学校問題」の解決後、新たな発展を期して源興学校は、元山の中心地へ校舎を移転することになった。1904年12月12日現在の状況は次のとおりである。

源興学校ノ紛議モ全ク着落シタル事ハ既ニ報ゼシ通りナルガ同校ノ現在位置タル臥牛洞ハ居留地ニハ近キモ延長一里モ在ル韓人町ノ最北端ニ偏在シテ一般生徒ノ通学ニ不便ナルニヨリ今度元山里ノ中央地タル定期市場ノ付近ニ位置ヲ選定シ適當ナル屋舎アルヲ幸ヒ修繕ヲ加ヘ既ニ工事モ出来上リシヲ以テ不日移転開業式ヲ執行スル筈ニテ大木副領事ナドモ熱心尽力セルガ如シ<sup>(15)</sup>

ところで、1905年2月22日付の『大韓毎日申報』には、「日本公使が外部（韓国外務省——稲葉註）に照会するには、元山に日語学校を設立したいので、校舎を建築する土地を貸与せよとのことなり」という雑報記事がある。源興学校は、この直前の12月12日の時点で「既ニ工事モ出来上リシヲ以テ不日移転開業

式ヲ執行スル筈」であったから、日本公使が土地の貸与を要求したのが源興学校自体のためであったとは考えにくい、その可能性がないことはない。

筆者の手にある源興学校関係の資料としては、1906年4月の『教育実験界』記事が最後のものである。これには、「教師は現在八名にして其内の四名は韓人の由なるが専任教師の外課外講演者として韓民中の老儒先輩等自ら進んで女史の事業を助け元山の父老は手を額にして女史の徳を称し居れりとなり」<sup>(18)</sup>とある。すなわち、日露戦争の終結（1905年9月）から半年を経ても近藤範治は帰らず、源興学校の経営は、依然として「女史の事業」だったのである。

源興学校のその後の変遷については、今のところ明らかにしない。ちなみに、統監府総務部内事課が1906年7月に発行した『韓国事情要覧』の「韓国ニ於ケル日本人教育事業ノ現況ニ関スル図表」には源興学校の名はない。恐らくは、この直前に近藤淑子の手を離れ、日本人の教育事業ではなくなったのであろう。

## 二 源興学校の教育

源興学校が、1899年、生徒20～30名を擁する家塾として発足し、1900年5月、規模拡張とともに改めて源興学校と称したことは先にみたとおりである。初期の状況については、これ（『教育実験界』、1906年4月）以外に資料がない。源興学校の教育に関する最も古い、かつ最も詳しい資料は、1902年夏に同校を視察した恒屋盛服の次の報告である。

主任教師は近藤範治氏にて夫人淑子教授を助く別に名誉校長として徳源府の名望家金永浩名譽漢文教師に正三品尹定夏及進士李徳一を挙く有給漢文教師は申龍相一名なり

生徒総数四十四名内出席者三十四五名なり之を高等、中等、初等の三科とし初等一年中等二年高等二年を修業年限と定む中等は普通の卒業年限なり現に中等科に在学せる生徒は六名にして入学後二年二月を経たるもの普通の読書、翻訳、会話を能くす其進歩驚くべきものあり殊に高等科は近藤夫人の受持にて全然日本語を以て教授す』生徒出席他に比して著しく多数なるは生徒申合せて源興会と云へる校友団体を起し嚴重なる規律の下に各生を団束せること独逸の学生団体の如きもの存するの結果にして韓国に在ては稀有の事と云ふべし

……（中略）……

在校時間は午前九時より日暮までと定め必ず之を強行す是れ父兄の求めに依り郷間怠惰の悪習に染まさらしむるの方法なりと云ふ

養蚕教授 養蚕時期に於て近藤夫人之を教授す昨年日本種を用ひて飼育したるに頗る良繭を得近傍の村民之に習はんことを欲し続々教授を依頼し来れり練習生は上級生并に退学生を合せ十三なり

又別に夜学科を置き我居留地及び韓国の青年にして昼間就学の暇なきものに之を授く生徒各七八名あり<sup>(17)</sup>

これによって、当時の教師陣・生徒数・修業年限・教育内容・校友団体の活動・在校時間などを知ることができる。以下、これらの各項目について、他の資料を加味しながら補足していきたい。

教師陣は、近藤範治が主任（校長）で、夫人淑子がこれを補佐した。淑子の担当は、主として高等科および養蚕の指導であった。なお、範治の日露戦争出征後、淑子が事実上の校長となったことは前述のとおりである。近藤夫妻のほかには有給漢文教師として申龍相がおり、正式の教師はこの3人であった。名誉校長・名誉漢文教師も含めれば、都合6人となる。これに対して、先に一度引用した1906年4月の資料によれば、「教師は現在八名にして其内の四名は韓人の由なるが専任教師の外課外講演者として韓民中の老儒先輩等自ら進んで女史の事業を助け」ていた。8名の内訳は、日本人4名、韓国人4名であったというのであるが、日本人のうち特定できるのは、淑子と、範治の後を襲って代理校長となった元・元山小学校教員の2名だけである。しかし、当初近藤夫妻のみであったのに比べれば2名の増強である。一方、韓国人教師4名は、文脈からしていずれも専任であったと判断され、これまた当初より3名増えたことになる。さらに、専任教師のほかボランティアの韓国人講師がいたことも注目される。

生徒数は、1902年夏の44名から同年秋には60名を越えた。この60余名は、11月16日の第4回進級証書授与式に出席した生徒の数である。ところが、翌1903年9月には在校生が42名に減少している。しかし、再び増加に転じて、1904年の「源興学校問題」の直前には「今ヤ七十余名ノ生徒ヲ有スルノ盛況ヲ来」<sup>(18)</sup>した。同問題は1ヶ月余で落着し、その後、新校舎への移転など復興策がとられたことは事実であるが、紛争中の退学騒ぎや登校拒否の後遺症もあったであろうことを考えると、「源興学校問題」以後生徒数が大幅に増えた可能性は少

ない。したがって源興学校の生徒数は、家塾発足当初の20～30名から最大70余名の間で推移したと思われる。

修業年限については、明治「三十三年五月大に規模を拡張して……予科三年正科五年通じて八年の課程となし」という前掲資料がある。すなわち、源興学校としての正式発足当時は3年の予科があったというのである。しかし、1902年夏には、「高等、中等、初等の三科とし初等一年中等二年高等二年を修業年限」としている。予科は、この間に廃止されたのであろう。夜学科の設置が、予科廃止のいわば代償措置ではなかったかと考えられる。初等・中等・高等各科の生徒数をみると、1902年夏の在学者総数44名中、「普通の卒業年限」とされていた中等科の在学者は僅か6名に過ぎなかった。換言すれば、源興学校生徒の大部分は、修業年限1年の初等科に集中していたのである。1903年9月4日の第1期卒業式にあたり卒業証書を授与されたのが4名（普通科3名、特科1名、年齢16～19歳）であったことも、これを裏付けている。

教育内容に関する情報は多くないが、上の恒屋報告に「入学後二年ニヶ月を経たるもの普通の読書、翻訳、会話を能くす其進歩驚くべきものあり殊に高等科は近藤夫人の受持にて全然日本語を以て教授す」とあるところから、源興学校が日本語教育にかなりの成果をあげていたことは確かである。この点は、他の日語学校と比較しても際立っており、恒屋は別の所で、「日語学校中学生の進歩著しきは釜山開成学校元山源興学校馬山浦合設日語学校とす是等学校は其位置の開港場に在るを以て日語の必要を感ずること深く文明の事物に接触すること多きに依るべしと雖も主任教師の熱心と注意の周到なるは進歩の本源ならんと信ず」<sup>(19)</sup>ともいっている。日本語教育以外に源興学校が力を注いだのは、体操と養蚕だったようである。「器械体操は日人も及ばぬ程に上達せし者もありたり」<sup>(20)</sup>といわれ、養蚕は、学校内において成果をあげただけでなく、その波及効果は永興・端川地方にまで及んだ。近藤範治は、1903年9月、次のように養蚕指導の成果を誇っている。

永興端川は御承知の絹産地として有名なる所に候が今春本校よりの養蚕説明書其他蚕種等の配布に依り大に在来の方法を改正する必要を感ぜしものゝ如く端川（距元山七十五里余）よりは来春植付の間に合ふべく一万五千株永興（距元山十四里）地方より七千余株の注文有之候本校は進で是等の面倒を見る積りに御座候<sup>(21)</sup>

次に、校友団体についてみておこう。校友団体「源興会」の存在は、源興学校の教育に関して特筆すべきもので、この種の団体の活動は、まさに「韓国に在ては稀有の事」であった。「嚴重なる規律の下に各生を団束」したというのは、具体的には、源興会が欠席生徒に制裁を加えたことを指す。別の表現を借りれば、「生徒の中には同窓会のやうなものを造つて、欠席する者は其の同窓会の制裁でもつて鞭で打つとか、或は除名するとか云ふ事までやりつゝあります」<sup>(22)</sup>というのであった。前述した生徒数の一時的減少は、あるいは源興会による制裁の結果であったかもしれない。

ついでながら、源興学校生徒の監督・制裁は、生徒相互間でのみ行なわれたのではない。「各町に二三名宛の監督者を囑託して生徒等が外出中の品行を取締り又一週に一回監督者及び父兄を学校に招集して監督者より一週間に於ける生徒の品行を報告し喫煙其他の不品行を為したる者は之を罰し善行あるものは之を賞することゝしたるに其結果頗る宜しく韓民の最も難しとする禁煙を實行し早婚の弊を改むるを得たり」<sup>(23)</sup>という。すなわち、元山の地域社会に監視網を張り巡らし、喫煙・早婚その他品行一般を監督したのである。前述したように、東亜同文会元山支部は、「韓人教育を奨励監督するを以て目的」としたが、この「監督」の部分がまさにこれを意味したと思われる。

源興学校生徒（昼間部）の在校時間は午前9時から日暮までで、しかもそれは、父兄の求めに応じたものであった。というのは、当時はまだ書堂教育の伝統が根強く、生徒は朝から晩まで学校に在るべきだという観念があったからである。これに関連して、『韓国教育ノ現状』には次のような一節がある。

旧学時代ニ於テハ唯ダ經学ノ素読暗誦ヲ為スニ止リ教師ノ面前ニ於テ且暮喃々音読シ授業時間ノ制限アルニアラズ教科課程ノ設ケアルニアラズ兒童ハ朝ニ出テムタニ帰ルヲ例トシ恰モ昔時日本ニ於ケル寺小屋ニ類似シタルモノナリシガ普通学校ニ於テハ毎日一定ノ授業時間ヲ定メ一日五時間ヲ課スルヲ以テ学徒学力ノ上進ヲ疑ヒ且学徒ノ昼間帰宅スルヲ嫌フノ傾アリタリ<sup>(24)</sup>

生徒が朝から晩まで学校にいたということは、源興学校の教師と生徒はほとんど起居を共にしたと言い換えても過言ではない。加えて、源興学校には夜学科もあったから、近藤夫妻を始めとする教師たちは、文字どおり終日、授業と生活指導に従事したといえることができる。

## おわりに

序言でも述べたように、源興学校の最大の特色は、なんといっても同校が近藤範治・淑子夫妻の主導によって設立・運営されたことである。しかも夫妻は、当時の日本人としては極めて珍しく韓語に堪能であった。統監府開設（韓国の保護国化）後、統監伊藤博文は官公立普通学校の日本人教員に対して、「諸君が児童を教育するに臨んで最も必要なのは言語である。如何に親切に誘掖しようとしても、言語の通じないためにその目的を達することの出来ない場合は少くないと思ふ。諸君は教授の余暇韓語を学ぶことを忘れぬ様にして貰いたい。是は切に希望する所である」<sup>(25)</sup>と訓示しているが、近藤夫妻は、伊藤統監のいわんとするところを、私立日語学校において逸早く実践していたのである。源興学校が名を成したのは、近藤夫妻の語学力が大きな要因であった。不幸にも、範治の語学力が結果的に禍して、つまり、彼が日本陸軍の通訳であったが故にロシア軍の捕虜となり、源興学校は校長不在の事態にたち至ったが、淑子の教師としての資質は、これをよくカバーした。彼女が生徒・父兄をいかに掌握していたかは、「源興学校問題」に際しての彼らの行動が証明して余りある。参考までに、時の文部視学官野尻精一も、「近藤範治といふ人の設立に係る元山の源興学校といふのも有名のものである、然るに近藤氏は昨年通訳として金州丸に乗り遂に俘虜になつたので学校は細君が管理して居るといふことである、感心なことである」<sup>(26)</sup>と称賛していることを付言しておく。

日本語を始めとして体操・養蚕の教育に成果をあげたこともさることながら、源興学校の教育の効果は、生徒の生活指導面においても顕著であった。校友団体「源興会」が、欠席生徒に制裁を加えることによって出席率の向上に貢献したこと、地域住民の中の「監督者」が、生徒の校外での品行を取締り、とくに喫煙・早婚などの風習を改善したことなどがその現われで、それ自体、韓国教育史上特異な現象であった。しかし、これはそもそも彼らの自発的な行動ではなく、やはり近藤夫妻の教育的意図の反映であったとみるべきである。源興学校は、「日本人の有志者が韓人啓発の為設立した」<sup>(27)</sup>ものであるが、この「啓発」の中には、年少者の喫煙や早婚など当時のいわゆる「弊風」の廃止も含まれていたわけである。

## 注

- (1) 原典は『韓国史研究』第10号, 1974年9月, 邦訳は『韓』第35号, 昭和49年11月所収。
- (2) 『東亜同文会報告』第38回, 明治36年1月1日, p. 82.
- (3) 『教育実驗界』第17巻第7号, 明治39年4月, p. 79.
- (4) 『東亜同文会報告』第38回, pp. 75-76.
- (5) 同上 pp. 76-77.
- (6) 同上 p. 66.
- (7) 同上 p. 67.
- (8) 『東亜同文会報告』第59回, 明治37年10月25日, p. 41.
- (9) 『東亜同文会報告』第37回, 明治35年12月1日, p. 11.
- (10) 『東亜同文会報告』第59回, pp. 41-42.
- (11) 『東亜同文会報告』第38回, p. 76.
- (12) 『東亜同文会報告』第59回, p. 42.
- (13) 同上 p. 43.
- (14) 『東亜同文会報告』第60回, 明治37年11月25日, p. 48.
- (15) 『東亜同文会報告』第61回, 明治37年12月25日, p. 55.
- (16) (3) に同じ。
- (17) 『東亜同文会報告』第38回, pp. 76-77.
- (18) (8) に同じ。
- (19) 『東亜同文会報告』第38回, p. 93.
- (20) (9) に同じ。
- (21) 『東亜同文会報告』第48回, 明治36年11月10日, p. 61.
- (22) 『東亜同文会報告』第36回, 明治35年11月1日, p. 35.
- (23) (3) に同じ。
- (24) 韓国学部『韓国教育ノ現状』明治43年, p. 22.
- (25) 高橋濱吉『朝鮮教育史考』帝国地方行政学会朝鮮支部, 昭和2年, pp. 126-127.
- (26) 『教育界』第4巻第10号, 明治38年8月, p. 87.
- (27) (9) に同じ。